



薬局・薬剤師のためのニュースメディア

© 2023じほう

HARMACY NEWSBREAK

株式会社 じほう

弊社の許諾なしに、転送・転載、複写そのほかの複製、翻訳、およびデータの使用は固くお断りいたします

リフィル発行率、2月に過去最高の0.0989%

日本システム技術、今後も緩やかな増加を予想

ビッグデータの分析・活用サービスなどを手がける上場会社の日本システム技術（JAST、東京都港区）が今年2月までの期間を対象に、リフィル処方箋に関する調査結果をまとめたところ、同月にリフィル処方箋の割合が過去最高の0.0989%に上ったことが分かった。リフィル処方箋の発行が始まった昨年4月分は0.03%台、半年後の昨年10月分は0.08%台だった。同社では「徐々にではあるが、増えていく傾向が見られる」としており、今後も緩やかな増加を予想している。

同社はリフィル処方箋の実態を調べるため、昨年4月から今年2月診療分までの11カ月分のレセプトデータを基に調査を行った。調査対象は同社が保有するレセプトデータ（約850万人、2023年5月時点）のうち、22年4月～23年2月診療分と比較用（21年4月～22年2月診療分）のデータ。同社は健康保険組合と共済組合からのデータを集約しており、働き世代とその家族が中心。65歳以上は少なく、75歳以上のデータは含まれていない。

調査結果によると、月別のリフィル処方箋の割合は昨年4月、0.0399%だったが、5月には0.0633%に上昇。昨年7月に0.07%台、昨年9月に0.08%台になった。今年2月には0.0989%となり、それまで過去最高だった今年1月の0.0983%を上回った。

同社では「徐々に右肩上がりが増えていく傾向がある」と指摘。今後についても「少しずつではあるが、増えていくのではないかと捉えている」と話している。

●「その他のアレルギー用薬」が最多

薬効分類ごとのリフィル処方箋の処方割合上位は「その他のアレルギー用薬」が26.43%で最多。2位は「高脂血症用剤」（15.21%）となり、3位には「血圧降下剤」（13.67%）が入った。以下には「消化性潰瘍用剤」（10.11%）、「血管拡張剤」（8.48%）などが続いた。

病床規模別のリフィル処方箋の処方割合は「500床以上」が0.289%で最も割合が高く、2番目は0.271%で「300～399床」となった。3位は「400～499床」（0.094%）。4位以下は「200～299床」（0.086%）、「1～19床」（0.075%）などとなっている。同社では「リフィルのさらなる普及のためには、200床未満の病院や診療所でのリフ

イル普及率の上昇が望まれる」としている。

●診療科別では「循環器内科」がトップ

診療科（第一標榜）別のリフィル処方箋の処方割合は「循環器内科」が0.54%でトップ。2位は「胃腸内科」（0.20%）で、3位は「婦人科」（0.17%）となった。

薬効分類ごとのリフィル処方箋の処方割合上位5位までを対象にそれぞれ算出した、リフィル処方箋の処方前後の1人当たり医療費の平均変化率では、「その他のアレルギー用薬」（14.90%減）、「血圧降下剤」（14.76%減）、「血管拡張剤」（12.66%減）などの下げ幅が大きかった。

同社は東京証券取引所プライム市場に上場しており、システムコンサルティングなどを手がけている。（星 光洋）

【編集部への情報をお待ちしています】

記事へのご意見、ご感想、情報など編集部（pnbpress@jiho.co.jp）までお寄せください。